

第1回京都市水共生プラン基本方針策定委員会議事要旨

日 時 : 平成15年9月21日(日)午後2時~4時35分
場 所 : 平安会館(京都市上京区烏丸上長者町下ル) 平安の間
出 席 : 上田委員,栗山委員,関根委員,中川委員,野田委員,藤井委員,
増田委員,山本委員(以上8名)
欠 席 : 嘉田委員

(開 会)

(野嶋建設局長挨拶)

(委員自己紹介)

(要綱等の説明) 委員会設置要綱およびプランの主旨・位置づけ・構成の説明

(委員長選出) 委員の互選により中川委員を委員長に選出

(講 演) 栗山委員,中川委員長の水をテーマにしたご講演

(休 憩)

(資料説明) 事務局より配付資料の説明

(討 議)

上田委員 雨水利用の会の趣旨が入っていて心強いが,説明を聞いていると雨水を敵に回すような発想・トーンに聞こえる。

(京都・雨水の利用をすすめる会の活動では)環境と共生する雨水の利用を考えており,基本的な手法は貯留と浸透である。

いつも気になるのは家庭に対する雨水利用の情報が少ないことである。京都には琵琶湖の疏水・地下水というものが豊富にあり,水の価値が相対的に低い。

特に雨水については排除すべき対象となっている。

従って,近代の都市設計,ライフスタイルはウエット(潤い)からドライ(乾燥)指向である。

そのため,水共生プランには文化・遊びを取り入れる考え方が必要ではないか。

雨水利用を促進していく時,下水道料金の問題がある。

無料にするなどの措置が必要である。

ドイツでは雨水利用をすることで下水道料金が安くなっている。

浸透では大気汚染物質(NO_x , SO_x)の地下水への影響(汚染)が問題である。

この意味でも化石系燃料を削減していかなければならない。

下水道のエネルギー消費についても触れた方がよい。

例えば、京都市の事業の中で上下水の事業に35%,下水道事業では24%の電気エネルギーを消費しているのは問題ではないか。

- 栗山委員 京都市の地下水は自噴しなくなってきた。
昭和3年に伏見の地下水を守る運動(陸軍・近鉄の地下化計画に対して)が行われていた。
その後30年たった昭和35年,再度,地下水の大規模な調査を実施,この結果,浅層地下水の流量は減少したが,幸いにもその流動方向および水質はあまり変化していないことが確かめられた。
また,40年ほど前までは浅層地下水のみを利用していましたが,流量が減ってきたため井戸を深くし,現在では深度50m~150mの深井戸が酒造用として使われている。
伏見の付近は京都・大阪のベッドタウン化でマンションなどの地下工事を伴う建築物が増加してきた。
市が建築許可を与える場合に伏見の地下水を遮断しないよう指導して頂くようお願いし,私共も工事業者と交渉,協力を依頼してきた。
こうした努力の結果,現在も酒造りはすべて地下水で行われている。
地下水保全のためにも,雨水浸透が必要ではないか。
日本人は以前より自然や水と対決するのではなく,自然と共に生きてきた。
これは日本人の古代からの考え方であり,特色となっている。
このことを忘れずに基本計画を考えることが重要ではないか。
- 関根委員 京都市民は水の怖さ,ありがたさを十分理解していないのではないかと。それはなぜか。
京都の水は琵琶湖疏水によってまかなわれている。
近年,京の顔・鴨川の氾らんによる洪水被害が見られないことが大きい。
京都の文化,産業,歴史は水によって支えられてきたが,そうした実感が薄いのも現実だ。
以前,鴨川の上流にダムを造る計画が提起され,京都市民も鴨川に注目したが,鴨川が京都府行政のせいもあってか,京の水を考える市民運動と広がりを欠いた。
こうした事情を踏まえると,京都市にとって雨水は水源であり,治水対策として重要であることは理解するが,洪水から市民生活を守り,育て,生かす視点にたった「雨水とともに生きる都市」づくりには,市民の参加が欠かせない。そのためにも市民,NPO,行政などの役割分担を明確にした施策の展開が必要ではないか。
- 野田委員 ハード対策は必要最小限にして,ソフト対策を充実させるべきではないかと。
(委員会が)終わった後に何をするのかを検討する必要があるのではないかと。

いか。

ヒートアイランド対策と言うことで、夏に東京で「打ち水大作戦」が実施され、その結果として気温が1 程度下がった。

打ち水などを京都市でのライフスタイルに取り入れることを考えることが必要ではないか。

また、雨水の貯留槽に補助金を設けることが必要ではないか。

水の集まるところに人が集まるので、地下に施設を埋めてしまうのではなく、貯留水を地域で利用できるような施設にする必要があるのではないか。

人の集まる場が水問題に関する入口になると期待している。

藤井委員 雨水浸透と洪水対策は分けて考える必要があるのではないか。
地域の水を豊かにするということでは、なるべく貯めてゆっくり下流へ流すことが重要ではないか。
資料に示されている地下浸透の効果としては流出の時間遅れがあるはずである。
洪水対策では、京都市の山の水をどのように処理をするかということが大事である。
雨水を浸透させることで地下水が増えることになるが、これは今の水の流れが変わることになる。
また、大気汚染の問題では石油系の汚染源（多環芳香族）も含まれており、地下水の水質も考える必要があるのではないか。
予算面や費用面の問題を上手に解決してもらいたい。

増田委員 上流域の問題が抜けている。
上流の森林管理、人工化したところの緑化も計画に入れて欲しい。
都市の砂漠化で水分が減少し、京都の霧の日数が減っている。
浸透対策はヒートアイランド現象（相対湿度の向上）に効果がある。
既成市街地の対象が今後の建替住宅なのか、既存住宅も対象なのか不明である。
難しい面もあるが、既存住宅にも助成金などで整備していくことがよいのではないか。
（また、治水面では）地球温暖化の影響で、大型台風の襲来が京都でもありうる。

山本委員 市民に対する情報提供が少ない（特に家庭での雨水利用について）。
市民も自分でできることを考える機会がない。
大雨で増水していても、平気でお風呂の水を流したりする。

みんなが半日我慢して流さなければ、川はあふれないかもしれない。
家の近所では、普段流量の少ない東高瀬川が大雨で増水し、下流のことが心配になることがある。
また、浸透性の車道を整備しているが、浸水被害の防止のためにも望ましいことと思う。
水を地表に貯めて人の集まる空間を整備することも必要ではないか。

中川委員 貯留施設は治水効果が大きい。
浸透施設は地下水涵養にも効果があるが、大雨の時には効果が小さい。
貯留施設は地表面で工夫すればできる。
琵琶湖疏水の役割が大きく、水の使用量が増えてきた。
疏水がなければ、今の京都の地下水は枯れてしまっている。
百年先を見据えた対策が必要である。
貴重な京都の水を持続的に使っていける都市の構造にすることに大きな意義がある。
市域内に潤いを整備する（堀川、西高瀬川などに水を流す）には、疏水に頼るのではなく、自前の水源が必要である。
（地下水を水源として利用するには）地下水の実態（水位、量）を知ることが重要である。
京都の地形では健全な水循環を構築することは難しい。
例えば、下水処理水をポンプアップすることなどが必要である。
そのためには、市民の知恵をもらいながら京都市の関係局が一体となって取り組んで欲しい。
それには情報提供が必要であり、PR も大々的に行うべきである。

（連絡事項） 第2回以降の委員会の予定について連絡（第2回委員会は11月16日、第3回委員会は12月6日、第4回委員会は12月21日とする。）

（奥村建設局水と緑環境部長あいさつ）

（閉会）

以上